

作品制作を通した美術鑑賞の授業実践 －ジュゼッペ・ペノーネ《川になる3》の鑑賞－

小松 俊介

はじめに

芸術科目は学習指導要領において A 表現・B 鑑賞の2つの領域からなっている。そこでは表現と鑑賞が相互に働き合いながら学びを深めることが推奨されている。近年の教科書改訂により内容が充実し、特に美術史が増えていることも鑑賞の授業で扱えるようにとの配慮からだろう。一方で、純粋な鑑賞の授業をカリキュラムにどの程度取り入れているかと言われると、多くの時間を表現（作品制作）に割いているのが現状である。導入時の参考作品の鑑賞や生徒作品の鑑賞活動を含めることで A 表現・B 鑑賞のバランスを図るというのが多くの学校での現状ではないだろうか。授業における生徒の意識にも変化が見られる。鑑賞の授業で配布した印刷物やスライドに示した画像を見た時に「これ（コピー）では何もわからない」と正直な反応が返ってくることが多くなった。スマートフォンを使って、美術館の収蔵作品やデジタルアーカイブを検索すれば、そこでは授業の配布資料よりも鮮明な画像を閲覧することができる。いずれにしても、それらが如何に鮮明であろうとも、本物の複製品であることを前提にしなければ、教室で行う鑑賞の授業は成り立たない。

様々な鑑賞の授業のあり方を模索する中で、作品それ自体（もの）を鑑賞するよりも作家の取り組み（こと）に注目する方が、生徒の興味関心が深まるということがわかってきた。例えば、作家に焦点を当てたドキュメンタリー映画の杉本博司ⁱ「はじまりの記憶」や石内都ⁱⁱ「ひろしま」などを鑑賞した際の生徒の反応はとても大きい。映画には、作品のコンセプトから作品が完成するまでの過程が、作家の言葉とともに記録されており作品理解だけではなく、作家が制作活動や発表を通して社会とどのように関わっているかについても学ぶことができる。このように美術作品の“もの”自体を鑑賞することから作家の取り組みである“こと”へ注目することは美術の鑑賞において重要な視点になる。

以上のことを受けて、教室で実施する（実際に本物の作品を鑑賞できない）鑑賞の授業の取り組みを工夫してみようと考えた。本題材では、作品そのものの内容や本質を「知る・理解する」という次元よりも一歩踏み込んで「経験・共感する」というところを目標とする。その方法としては、作家の取り組みに注目し、その制作過程を擬似体験することで鑑賞活動がより一層深まるのではないかというものである。作家の手法を学び、模倣することで作家の取り組みと同じコンセプトに基づく“もの”を目の前に作品として出現させることが可能になれば、複製品を鑑賞するよりもさらに深い次元での鑑賞活動が可能となるのではないだろうか。美術館やギャラリーで作品と対峙して初めて感じ取れるものがあり、写真ではその全ての魅力が伝わらない。今回取り上げるジュゼッペ・ペノーネ（Giuseppe Penone 1947～、イタリア）は、まさにそのような作家である。筆者自身も非常に感銘を受けた作家であり、生徒にとっても現代アートの導入題材としてもふさわしいと考えた。

1 授業題材の設定

1-1 題材設定の意図

本校の美術選択者は、美術に対して苦手意識を持つものも多くいる。静物デッサンや自画像など、対象を見て描くといった題材に対しては、より強い嫌悪感を示す生徒もいる。この背景には、発達段階の問題がある。中学生から高校生になる段階では、対象とそっくりに描きたい気持ちはあっても、技術の不足により出来上がった作品に理想と現実の乖離を感じてしまう場合がある。頭の中にははっきりとしたイメージがあるのだが、どうしてそれが画面に描けないのか分からないといったもどかしい経験は誰しもあるのではないだろうか。前向きに捉えるならば描かれた作品と対象が、どこか「異なる」ということを本人が自覚しているということである。その厳密さに個人差はあっても違いがあることに気づき、納得がいかないということは、もっと上手く描きたいという気持ちの表れでもある。では、そもそもなぜ人は何かをそっくりに表現したいのだろうか。そっくりに描いたり作ることを通してどのようなことができるのか。そのようなことをペノーネの取り組みを通して生徒たちを感じ取ってもらいたい。ペノーネ作品の魅力は、独自のコンセプトと確かな造形力によって成り立っているところにある。現代アートの導入題材として、コンセプトの重要性を踏まえつつ、造形することの楽しさも経験できる点でペノーネの《川になる3》という作品に焦点を当てた。一見して理解できない作品も、制作意図を知って鑑賞すると見方や感じ方が変わるといような作品を数多く手掛けている。この授業を通して、生徒たちの現代アートに対する敷居を取り払う契機となれば嬉しい。

1-2 ジュゼッペ・ペノーネ

ジュゼッペ・ペノーネ（Giuseppe Penone 1947～、イタリア）は、アルテ・ポーヴェラを代表する作家として日本でも有名である。2009年には、豊田市美術館で大規模な個展が開催され、2014年には高松宮殿下記念世界文化賞ⁱⁱⁱを受賞している。

アルテ・ポーヴェラとはイタリアで起こった芸術運動である。直訳すると「貧しい芸術」となる。ポーヴェラ（貧しい）というのは“豊かな”の対にある言葉であるが、その時代の芸術活動の所謂主流ではなく、敢えて身近な素材を選択して作品にしようとしている作家らの姿勢や取り組みを総じてつけられた名称である。例えば、作品《マルティン・アルプス-この部分を除いて木は成長し続けるだろう》（1968-1978）【図 1】では、ブロンズで形作られた手の彫刻をまだ細い木の幹をつかもうとする様に固定する。この状態で10年間放置することにより、木は成長しブロンズ製の手の幅を徐々に超えて膨張しようとする。鑑賞する側からは、ブロンズの手が木の幹をグニユッと掴もうとする格好になる。彫刻作品が自然界の時間を浮き彫りにする作品と言えるだろう。その後の取り組みである作品《森を繰り返す》（1969-1991）は、建築の梁に使われる木材のある年輪の層まで削り落とす過程で、我々が普段目にする「木の節」の部分だけ残した作品である。そのシリーズの《ベルサイユの杉》（2000-2003）【図 2】は巨大な杉の木の内部に節の部分を残して、ある年輪の層まで彫刻

した作品である。木の幹の中に木があるという不思議な形が頭になっている。乾燥した板材から節目の部分がポロリと外れることはあるが、そのことから自然に生えている木の内部の構造までは私たちの想像は及びもしない。ペノーネの表現手法は、彫刻家が形や量の仕事で空間に訴えかける表現方法とは全く異なるものである。私たちが普段意識化できない身近な自然の中にある事象を作品として表現している作家である。ペノーネの作品の魅力は、作家の優れた感性と鋭い洞察力によるものと言えるだろう。

1-3 作品《川になる3》大理石、30×40×30cm（2個）、1992年

本題材で取り上げる《川になる3》【図3】は、ペノーネの取り組みの中でも1990年代に取り組みされた「川になる」という作品群の一つである。作家が、河原で拾った石を上流部にある同質の岩石を用いて精巧に模刻し、本物の石と模刻した石を2つ並べて展示するという作品である。大きな岩盤の一部だった石が長年風雨に晒され崩れ落ちる。その後、川の流水作用によってゴロゴロと下流に運ばれ、他の石や岩とぶつかり合う中で角が取れて丸みを帯びながら河原に行き着く。そのようにして存在する無数の石の中からペノーネは、一つの石を選び取る。ペノーネは、その石が辿った果てしない時間を想像しながらノミを使って上流部から産出される同質の岩石に彫刻する。制作する際は3次元の座標位置を写し取る星取り法^{iv}を用いることでより精巧に再現することが可能となる。現代では3Dプリンターがあるが、科学的な力を借りずに伝統的な手法を用いて、雨風や川になるつもりで彫刻するというコンセプトが美しい。写真で感じるよりも実際の石は大きく、一見して気がつかない人はそのまま通り過ぎてしまう。立ち止まってじっくりと観察すると、自然の石が瓜二つの形でそこに存在することの違和感に気がつく。じわじわと時間をかけてその不思議な感覚が明らかにおかしいという確信に変わっていく。なぜ自然の石なのに同じ大きさ・形をしているのだろう…。疑問を感じて近くでよく見比べると本物そっくりに彫刻された石の表面には、櫛刃のノミ跡に気づく（作家が残している）。この時に初めて、自然の石を模刻していることに気がつく。また、同時にタイトルの意味合いを初めて理解することができる。ペノーネの確かな彫刻の技術と自然の営みや時間といった意識化しづらい事象に対する感性と洞察力に圧倒される。



図1



図2

2 授業実践《川になる3》の表現と鑑賞

2-1 事前準備

指導者が作品となる本物の石を河原で探し、様々な形・色の石を拾い集める。この際、勝手に河原の石を採取してはいけないので、地域の土木課に事情を伝え、許可を受けてから準備すると良い。その他、かるかるナピット(紙粘土)、三原色カラー・白(アクリル絵の具)、ヘラ、霧吹き、筆(丸筆・平筆)、筆洗、新聞紙等を用意する。ペノーネは、同質の岩石に彫刻しているが、生徒には扱いづらい素材なので紙粘土を用いて、模刻と彩色を施す方法で制作を展開する。



図3

2-2 導入(15分)

はじめに、生徒は美術教室に入る際に用意した石の中から好きな石を一つ選んで席に着く。何をするのか分からない中で、直感的に石と出会うことを大切にしたい。本来は、河原に拾いに行きたいところであるが立地的に困難なためこのようにした。

その上で、ペノーネの作品《川になる3》【図3】の写真をプロジェクターで提示する。二つ並んだ石の写真を眺めて「これはある作家の作品です。何か気づくことはありますか?」と質問する。しばらく返答はなく、これのどこが作品なのか、どのような意図があるのかを読み解こうとしている様子だ。そのうちに「石」、「二つの石は似ている」などの声上がる。「二つの石の関係は?」という質問を投げかけると「似たような形の石を探して並べた」、「石を3Dプリンターでコピーした」といった発言が見られた。二つの石が同じ形をしているという点に気がついたようである。「この作品は《川になる3》というタイトルの作品です。3はシリーズの3番目という意味です。ここから作者の意図を想像してみよう」と問いかけ、生徒に考えさせるが、それ以上の発言の深まりや展開は生まれなかった。生徒に主体的に考えさせた上で、最後に作品のコンセプトとペノーネという作家の取り組みについても簡単に説明した。これについては、前述したのでここでは省く。話を聞いてあまり表情を変えない生徒もいるが、なるほどと感じ入って鑑賞する生徒も多くいた。

その後に、本日の授業内容について説明をする。最初に選んだ石をそっくりに模刻し、彩色まで行うことを伝え、生徒は「スケッチをするのかと思った」とか、「もっと簡単な石にすればよかった」といった反応を示す。ここから一人ひとりが、ペノーネのように川になって、河原の石が体験した時間に想いを馳せながら、石の形を模刻し彩色を施していくことになる。

2-3 展開① 模刻 (80分) 【図 4】

ここでは河原の石と瓜二つになるように模刻をする。その際に彫刻の基礎的な概念について簡単に触れる。まず、河原の石を両手で握って全体の塊の大きさや重さを把握する。この際に目を瞑り、手の感覚に集中するのも良い。おにぎり握るように両手で石を握ることで、石の塊や量（大きさ）に注目する。その上で、石と同じ量の紙粘土を取り出す。

次に、大きな面や稜を意識しながら形を取る。表面の細かい部分に気を取られないように大きな塊と面の設定の部分で全体の印象を捉えるようにする。一人につき1個の石があるので本物をよく観察し、違いを発見できるようになって



図 4

いる。隣に並べて、真上から比較したり目線を石の高さまで落として高さを見比べることではっきりとした違いを認識することができる。自分自身でその違いに気づくことが理想であるが、どこが違うのか曖昧に捉えてしまう場合もある。その際は一緒に形の違いを探すことで「あっ、ホントだ」といった気づきとともに生徒は次のステップに進むことができる。まず、問題を発見することが重要であるが、これが意外に難しく、じっくりと対象を観察する目を養う必要がある。よく「そっくりに描けない、作れない、自分は不器用だから、美術は苦手なので…」と呪文を唱える人がいるが、実はこの「見て違いを見つける」という最初のステップがうまくできていないことが多い。形が現れ始めたら、底面の話をする。石には座りの良い置き方、そして見栄えが良い角度がある。その石の正面を決めて設置し、その上で底面になる部分もしっかりと形作るよう指導する。地面との接地面をしっかりと形作ることで、その存在は一層明確なものへと変化していく。ここまでを2時間続きの授業としてまとめ、作品は乾燥させる。

2-4 展開② 彩色 (80分)

形を作り終えた段階では、紙粘土による真っ白な外見により如何にも軽そうに見える。この状態から、石本来の持つ固有色に近づけるように三原色カラー（アクリル絵具）を用いて彩色を施す。本校では1年次の冒頭に色について学習しており、「光と色料の三原色」について理論を学んでいる。これを踏まえて、「色料の三原色」の理論を基に本当に様々な色を作り出せるのかという実践的な観点から三原色カラーを使って彩色を施す。石のような暗い色調は減法混色に向いており、また三原色（イエロー・マゼンタ・シアン）を混ぜ合わせることで微妙な色味を作り出すことができる。当然、三原色のみでは明度をコントロールできないので、白い絵の具を別に用意しておく。底面になる部分にも彩色を施し、白い部分が

なくなるようにする。白い部分があると粘土の素材感が伝わってしまい一気に軽く見えてしまうので、まずは白地をなくすことを目標とさせる。重色^vについての知識もあるので、下地が乾いてから次の色を重ねると深みが増すということを助言しながら制作を進める。また、パレット上で色を混ぜ合わせる最中に生まれる色にも注目し、変化の過程の色と同じ部分が本物の石の中にないか逆の見方をする 것도新たな気づきへつながるようである。色づくりをする際に、本物の石に絵の具をつけて確認しようとする生徒が出てくる。確実な方法ではあるが、ペノーネの制作意図からすると本物の石は綺麗な状態を保つことが望ましい。本物の石と作り物の石の2点セットで作品となることを生徒に確認させたい。

2-5 鑑賞 (15分)【図 5、図 6】

机を合わせて大きい台にして、完成した作品を並べる。本物の石と制作した石を両方とも無作為に並べるようにする。そのようにすると上手いかなかったという作品も自然石の中に溶け込んでしまい、不思議と本物と偽物の境目が曖昧になる。特に本物の石が偽物のように感じられてしまうのは実際に目の前に作品があつてこそ感じ取れる要素であろう。このことは、普段私たちが如何に物事をいい加減に見ているかということに気づかせてくれる。河原に落ちている石は、厳密に観ると一つ一つ形や色が異なり、それぞれ違いを有しているが、皆一様に「河原の石」と一括りにしてしまうのが人の営みでもある。

完成した作品を前に生徒からは「意外と自然に溶け込んだ」、「紙粘土なのに重たい石に見える」、「写真で撮ると本物との区別がつかない」などの前向きな意見から、「そっくりに作ったつもりでも色が鮮やかすぎた。それでもどこか河原の石に見える。」、「白い部分が残って、粘土感が出てしまった。」といった反省のコメントもあった。大半の生徒が、模刻と彩色の制作工程に集中して、完成した作品にも好感を抱いているようであった。特に、本物と作り物の二つの関係性は、作品写真では実感できないものがある。実際に作品を作り出したことで、ペノーネの取り組みと同じ工程を生徒自身が追体験できたのではないだろうか。生徒自身も面白がって写真を撮影していた。また、展示方法についても検討させる時間をとった。どんな場所にどのように展示するか、様々な展示プランが生まれた。「1対の作品を玄関に飾る」、「生徒の作品の全てを廊下に並べる」、「河原に持って行って並べてみる」「無作為に並べるのではなく、きちんと揃えて展示する」などの意見が出た。展示方法のパターンを考える上でも様々なアイデアが生まれ、場合によっては実際に展示して見え方の変化を検証することも良い学びになると感じた。



図5 左：本物の石、右：制作した石（生徒作品）



図6 四角い台紙に乗っているのが制作した作品

3 実践を通しての考察

3-1 授業展開の工夫と今後の課題

授業展開の工夫として、次の二つの方法を実践し、それについて検討を行った。

A. 授業冒頭に作品《川になる3》の写真を示し、タイトル・コンセプトを紹介した上で、模刻制作・彩色し、最後に本物の石と生徒作品を並べて鑑賞する方法
(2章で実践した方法)

B. 授業冒頭で作品《川になる3》の写真を示し、タイトル・コンセプトは紹介せずに伏せておく。二つの石がそっくりであることに気づかせてから、制作へ移る。模刻制作・彩色を終えて本物の石と作品を並べて鑑賞し、最後に生徒たちにペノーネの作品タイトルとコンセプトを考えさせる方法

Aの方法のメリットは、制作の取り組みに深みが生まれる（ように感じる）点である。例えば、「ペノーネのように“川になって”時間を想像しながら石を模刻しなさい」といった声かけをすることで、制作への意識の持ちようが変わってくる。単に表面的に形を整えるのではなく、地球規模の時間に想像を巡らせながら手を動かすことになる。

一方でBの方法のメリットは、ペノーネの作品制作の意図を考えさせることができるということである。冒頭の導入時において、河原の石とそれにそっくりに彫刻された作品が2つ並んでいるというところまでを確認し、この作品コンセプトを想像（創造）しながら、河原の石を実際に模刻して彩色することで、ペノーネの取り組みを推理していく。最後に、制作過程や完成作品を鑑賞しながら、生徒自身がペノーネの制作意図について考える。主体的に作品の主題を探すことに重きを置いた展開方法である。ところが、実際にやってみるとタイトルでは、「瓜二つ」、「自然の美」、「石の上にも3年」、「軽い石」など。コンセプトについての意見は、「自然の美しさを表現した」、「3Dプリンタに頼ることなく、手で作る技術の高さを示した」、「二つの石を並べて、知らない人が手に取った時に軽い石に驚く」といった具合である。生徒が、主体的に考えるという点では意義のある活動であるが、ペノーネ作品の核心に迫るような展開の深まりは生まれなかった。これについては展開方法のさらなる工夫が必要であると感じた。

二つの展開方法を試した上で、ペノーネの作品鑑賞を大切にする立場から考えた場合、Aの展開方法の方がより良いであろうと判断した。Aの展開に基づき、冒頭の導入時においてペノーネの作品の主題と制作意図について想像を巡らすステップを踏めば、主体的に想像（創造）することができる。その上で、本来の作品解説に移れば十分であると考えた。ペノーネの制作意図を知った上で制作に臨むことで、作家の取り組みを追体験することが可能となる。そのような形で作品制作に集中する方がより効果的であると考えた。

3-2 石の模刻と彩色

今回の授業実践を通して、模刻と彩色に関して興味深い発見をした。通常、彫刻の題材として自分の手や顔を対象として塑造やレリーフ制作をすることがあるが、自分の身体の一部を対象とする場合、素直に向き合いたくないという生徒も現れる。また、対象を切り離して観察できないので客観的に見るということが物理的に困難になる。授業の狙いもこの難しさ（面白さ）と如何に向き合うかという点が重要になってくる。生徒の中には、粘り強く制作してはいるものの、完成した作品については納得いかないものも多く見られる。様々な学校での実践を通した筆者の所見であるが、見慣れた自分の身体であるからこそ、微妙な形の差異を強く感じ取ってしまい、苦手意識を持つ生徒も出てしまうのだろう。これに対して河原の石は、生徒の生活において全くの意識の外にある存在といっても良いだろう。河原を歩いた時に、落ちている石の一つ一つに違いを見つけ愛でるような物好きも中にはいるかもしれないが、多くの者にとって空気や森の木々と同様に目を留めて逡巡するような対象にはない。そのため抵抗もなく客観的に対象と向き合うことが可能となる。また、掌で包み込めるサイズ感も形を捉えやすくなる要因の一つだろう。河原に転がるただの石ではあるが、そんな石も地球誕生からの膨大な時間を秘めた存在であると考えたと見え方が変化する。ペノーネの作品と出会うことで、物事の見方・感じ方が変わってしまうのだ。この意識の変革こそがアートの重要な点である。特に石という素材は、古来より大切にされてきた八百万の神々の存在やアニミズム信仰とも結びつく。人は石に特別な“何か”を感じ取ろうとし、様々な思想を見出してきた。そういった魅力を秘めた素材でもある。このような文化や素材の特性が背景となって、ペノーネの作品に自然と共感してしまうのではないだろうか。

もう一点、彩色について特筆すべき点がある。本題材ではアクリル絵の具の三原色カラーと白を使用して本物の石を模倣して彩色をする。彩色の際に、12色入りの絵の具を使用するよりも“色をつくる”という意識を強く持って制作できたのではないかと推察する。その意識の差は作品の密度にも表れている。これは、考えてみれば当然のことであるが、12色入りの絵の具では石の色に似ている色、つまり明度・彩度が低く黒やグレーに近い色を作ろうとする場合多くの生徒は、黒と白を用いてグレートーンを作り出し、そこに石本来の色みを足していくことになる。この際に緑っぽい色味であれば緑のチューブを取り出すだろう。つまり、白黒+何らかの色（1～2色）によって色を作るため、色幅が狭くなってしまう。これに対して、三原色を用いて色をつくる場合、微細な絵の具の調合によって様々な色味が現れる。微妙な均衡を保ちつつ石本来の色に近づこうとするため、複雑な色味が作れるのである。三原色という制約を与えることで逆に色幅が広がり、表現が豊かになることに面白さを感じた。

学習評価では鑑賞に重きを置きながら、紙粘土の模刻（彫塑）と彩色の両面からの作品評価を行った。作品鑑賞を経て個々の発言を聞き出すところで終えたため、最終的なフィードバックが不十分であった。この点は今後の課題としたい。

おわりに

授業実践を通して、教室での作品鑑賞において最も困難となる「本物の作品を用意する」ことができなくとも、作家の制作行為を追体験することで、作品の本質への理解を深めることができたと省察する。写真などの複製品の鑑賞に留まらず、作家のコンセプトに基づいて生徒自身が作品を生み出すことで、作品という“もの”の理解から一歩踏み込んで、作家の取り組み・行為である“こと”を体験し、共感することが可能となったのではないだろうか。授業のまとめとしては実際に美術館を訪れて本物の作品に対峙してほしいという結びにしている。ペノーネの作品「川になる」シリーズの他にも、コンセプトと制作面のバランスのとれた作品であれば生徒自身が制作を通して鑑賞を深めるという一つの型としての可能性が見えてきた。他にもこのような実践が可能となる作家や作品を今後も探していきたい。

この授業は、東京藝術大学美術学部主催の「幼稚園から大学まで美術教育の流れを体感する展覧会 美術と教育 全国リサーチプロジェクト 2019 こんな授業を受けてみたい！」に採用していただき、2019年10月13日～11月4日の期間、東京藝術大学大学美術館においてポスター発表と生徒作品を紹介していただいた【図7】。これについては、プロジェクトチームが作成した報告書があるので、そちらもご覧いただきたい。幼稚園・小学校・中学校・高校・特別支援学校・大学の美術に関する取り組みについて、全国から様々な事例が紹介されており、大変刺激的な内容であった。展覧会の参加を通して、美術のための美術ではなく、美術を通して社会とつながるということが大事な視点であると再認識させられた。多様性に対する理解や様々な分野を横断する力が求められる昨今、益々アートやデザインの重要性が見直されており、学校教育の場で美術を担当している者として、さらに見識や経験を深めなければならないと感じた。

謝辞

最後に授業の題材として取り上げた《川になる3》は、いわき市立美術館の所蔵作品です。現代アートの重要な作品が多数所蔵されています。ペノーネの作品もぜひ本物をご覧いただければ幸いです。鑑賞授業と「美術と教育 全国リサーチプロジェクト」の展示のために、作品写真の使用許可をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。



図7 「美術と教育 全国リサーチプロジェクト 2019」展示風景

註

- i 杉本博司 1948 年生まれ、写真家・美術作家。
- ii 石内都 1947 年生まれ、写真家。
- iii 高松宮殿下記念世界文化賞は、日本美術協会によって 1988 年に創設された。絵画・彫刻・建築・音楽・演劇・映像の各分野で世界的に顕著な業績をあげた芸術家に毎年授与される。
- iv 星取り法 原型の座標位置を写し取る機械。原型は石膏であることが多く、星の数が多ければ厳密な複製へと近づく。星取り機を使用する制作方法を星取り法と呼ぶ。これに対して、石の中に形を直接彫り込む方法を直彫り法という。
- v 重色 絵の具を直接混ぜ合わせる混色と区別し、画面上で異なる色を重ねること。透明水彩により効果的な技法であるが、不透明水彩においても多めの水で絵の具を溶くことで、下の層の色味が透けて色の深みが増す。

図版出典

図 1 展覧会図録『ジュゼッペ・ペノーネ展』p.33、豊田市美術館、2009

図 2 展覧会図録『ジュゼッペ・ペノーネ展』p.152、豊田市美術館、2009

図 3 いわき市立美術館

図 4～7 筆者撮影

*本題材は、彩色も重要な要素となります。図版に掲載した筆者撮影の図 4～7 についてカラー版の写真をご覧になりたい場合は、下記の QR コードからご参照ください。

参考文献

- ・展覧会図録『ジュゼッペ・ペノーネ展』、豊田市美術館、2009
- ・池野洵子『アルテ・ポーヴェラ：戦後イタリアにおける芸術・生・政治』
慶応義塾大学出版会、2016
- ・鈴木有紀『教えない授業』、英治出版、2019
- ・フィリップ・ヤノウィン『学力を伸ばす美術鑑賞ヴィジュアル・シンキング・ストラテ
ジーズ』、淡交社、2015



英語タイトル

Lesson Study on the Art Appreciation through Creation of Work

–Introducing “Become a River” by Giuseppe Penone–